

タイトル:平成 28(2016)年度 教育セミナー(第 12 回)

日時:2016 年 9 月 18 日(日)~21 日(水)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

「移動と交流による<イラン>の形成」

近藤 信彰 (AA 研)

本セミナーでは、激動の中東のなかで、高い政治的安定を保っているイランについて、ナショナリズムの形成の観点から論じるものであった。イランは、言語において、宗派において、歴史において、大半のアラブ諸国やトルコと明確に区別されるものとして、表象されることが多い。こうした<イラン>を成り立たせている要素として、①国土、②シーア派、③ペルシア語、④古代の四つを設定し、それらが近世以降、どのように形成されたかを考察した。

第一に、国土の面ではサファヴィー朝(1501-1736)の成立が大きく、2世紀以上に亘るその支配地は一定の地域的まとまりを得るようになったと考えられる。しかし、サファヴィー朝を建設した遊牧部族連合キジルバシュはいずれもアナトリア・北シリアから移動してきたものであった。

第2に、サファヴィー朝において採用されたシーア派信仰は、支配地に徐々に浸透していき、旧サファヴィー朝領であったヘラートやバクラーなども、現在は別の国に属しているがシーア派化したことを指摘した。しかし、サファヴィー朝最初期においてはイラン高原ではシーア派に関する知識が十分になかったこと、ジャバル・アーミルやバアルバックからアラブのウラマーが移住し、第2代タフマースプ時代の主なウラマーの半分を占めたことを述べた。

第3に、ナショナリズムの源泉の一つであるペルシア語も、当時のコンテクストでは決してサファヴィー朝に限られたものではなかったことを指摘した。特に、ムガル朝インドはその経済力により、多くのペルシア語文人を迎え、宮廷や官衙で活躍する機会を与えた。当時のペルシア語文化圏は、ムガル朝インドを除いては成立しえなかったものであり、サファヴィー朝がペルシア語文化を独占したわけではなかったのである。

第4に、当時のヨーロッパ人旅行者による古代認識が、のちに大きな影響を与えたことを指摘した。古典古代を教養として持ち、サファヴィー朝に到達したヨーロッパ人たちは、サファヴィー朝をアカイメネス朝やサーサーン朝と結びつけて理解した。この理解こそが、のちに、古代から一貫して続く<イラン>という認識につながった。

以上のように、同時代においては、いずれも移動や交流という別のコンテクストで生じた事象であった。しかし、近代に入って以降、これらを巧みに組み合わせ、現在に至るような古代から一貫する強固なナショナリズムをイラン人たちは築きあげて行った。研究者はそうした過程を理解しつつ、一方で同時代のコンテクストも尊重する必要がある。